

向坂逸郎にとっての三池

石河 康国



はじめまして、石河と申します。私は、向坂先生を語るような資格はございません。それはきょうお見えになっている和氣さんご夫妻のように語るべき方がたくさんいらっしゃいます。ただ、私がこういうところに来て、お話ししてもいいなと思ったのは、向坂先生と三池労働者の「かすがい」になった人物に灰原茂雄さんという方がいます。この方は三鉱連の事務局長をやって、それから、三池争議の最中は三池労組の書記長になりました。その後、炭労の事務局長をやって、最後に、向坂先生の要請を受けて社会主義協会の指導部に入られた。そして、ずっと先生と寄り添ってこられた方です。

この灰原茂雄さんと私は三十何年間、亡くなられるところまで非常に親しくしていただきまして、手取り足取りいろいろなことを教えていただいた。したがって、三池のことも、あるいは向坂先生が三池労働運動に果たした役割についても、だいたい灰原さんから伺ったこととご承知いただければいいかと思います。

もう20年ほど前ですが、『三池と向坂教室』という本が刊行されました。これは灰原茂雄さんと向坂先生が約30年間にわたって往復書簡をずっとやりとりされているのをまとめたものです。この書簡はもちろん9割方が三池の労働運動についてのやりとりです。これは灰原さんが本にするというので私がお手伝いをさせていただきました。

きょう話してもいいかなという気になったのは、これはどなたがおつけになったのか。五十嵐所長さんかもしれませんが、テーマが非常にいいんです。「向坂逸郎にとっての三池」というテーマ。これが「三池にとっての向坂逸郎」だと、少し私は遠慮したかもしれません（笑）。つまり、向坂先生と三池の関係は、だいたいマスコミやマスメディアでずっと流布されていますが、何か社会主義理論を外部注入して労働者をけしかけて闘争を激発させ、自分の理論の実験台に三池労組を使っただけというような感じのこと。あるいはそこまでいなくても、三池労組の人たちはあまりにも先生を信頼しすぎて無謀な争議をやって、分裂や差別、いろいろな苦勞を強いられた。これからの労働運動はああいうものではない。そういう少しソフトな感じに至るまで、だいたいそういうイメージで受けとられています。なかには向坂逸郎は三池労組の戦術委員会にまで出かけていって

1945年うまれ。1971年東大卒。社青同専従、雑誌『社会主義』編集部などをへて新社会党結党に参加。新社会党本部、社会主義協会（坂井哲郎・上野建一代表）役員。共著書『三池と向坂教室』『山川均・向坂逸郎外伝』、著書『労農派マルクス主義』上下（社会評論社、2008）など。趣味、労農派関係の一次資料の蒐集。

指導したなどという、とんでもないデマまで、今はそんなのではないでしょうけれども、昔よく飛んだそうです。

しかし、向坂逸郎にとっての三池ということになれば、相互浸透というのでしょうか、三池労働者と向坂先生が相互に勉強し合いながら、お互いが成長し、大きくなっていったという関係だと思っています。きょうはそういうことを中心にお話をさせていただきます。また、ご参考までに関連年譜を用意しました。

向坂逸郎にとっての三池・関連年譜

- 1897
2. 6 向坂逸郎 大牟田に生まれる（父・賀禄は三井物産社員）
- 1946
2. 3 三池労組、「日の丸」を掲げて結成大会
- 3.30 向坂、九州大学に復職
- 10 産別10月攻勢
- 11 向坂、講義のある秋冬と春だけ大牟田坂梨宅に下宿し九大の講義再開
- 1947
- 1.19 向坂、三池政治文化研究会で初の講演（湯村武人の紹介で灰原茂雄と親しくなる）
2. 1 ゼネスト中止
6. 1 片山内閣成立
- 8 山川、向坂『前進』発刊
- 秋 秋三池労組有志研究会『空想から科学へ』（向坂下宿で、灰原、塚元ほか）。
* 本所のほか、宮浦、三川などにも研究会発足、ガリ版でテキストづくり学習。
三池労組「同志会」として連携。『前進』の読者網とも重なる。
- 1949
- 2.15 本所支部『空想から科学へ』をテキストに社会科学研究会発足（週1回 会員209名）
- 5.15 灰原、三鉱連執行委員で上京、等々力の向坂宅を訪ねる
- 1950
- 1 向坂、大牟田から福岡に転居 三池労組本所支部長に塚元、労働部長に灰原
- 10 灰原ら「山川共産党」、レッドパージの対象となる。本所研究会60人から7人まで一時減
山川、向坂も「三井本社に押しかける用意」
- 1951
- 4 灰原ら向坂教室メンバー、社会党入党を開始
6. 1 『社会主義』創刊 阿具根登、宮川睦男、灰原も「主要な同人」
- 10.23～24 社会党分裂、左派社会党へ
- 1952
- 10～ 炭労・電産63日闘争（炭労大会提案の「63闘争自己批判」、灰原が起草）
- 1953
- 5 灰原、三井鉱山労働組合連合会（三鉱連）事務局長に就任し上京
三池労組組合長・宮川睦男、書記長・河野昌幸
- 8.7～11.27 三鉱連「英雄なき113日のたたかい」
- 秋 「左社綱領」論争
- 11.27 「英雄なき113日のたたかい」1,841名解雇撤回し勝利 総評内で注目あびる
- 年末 三池労組本所支部で向坂『資本論』学習会開始
* このころから、製作所支部を除く三池労組全支部に研究会はじまる

- 1955
11. 6 三鉱連と三井鉱山、「長期計画協定」締結（完全雇用を経営方針の第一義的な基本とする）
- 1956
- 「長計協定」と三権移譲による職場到達闘争への三井のまきかえし
- 3.16 会社ロックアウトに出る 三池労組43日スト
- 11 『みいけ十年』（向坂序）
- 1958
- 7 灰原、三鉱連事務局長を退任し三池労組書記長に
総評、太田・岩井体制へ 「組織綱領草案」の提案（三池職場闘争を「社会主義の下部構造の日本的原型」）
10. 4 向坂、灰原に「無責任な職場闘争」を心配し「近く迫る闘いは、困難を極めるだろう……職組に対する無用の挑発は絶対に避くべき」と私信
- 1959
- 3.28 安保改定阻止国民会議結成
- 初夏 灰原からの要請で、向坂、岩井・太田と支援体制づくりの相談。灰原、手紙攻勢
- 7.24 三鉱連御岳大会で、三池の独走を余儀なくされる
- 12.2～4 三池労組員1,492名に退職勧告（内社会党員120名 全党員の約半数）
12. 9 三池労組臨時大会で向坂激励
- 12.11 三池労組員1,297名に指名解雇勧告
- 1960
- 1.25 三池労組無期限スト開始
- 2.12 向坂、九大の最終講義
- 2.15～18 炭労臨時大会、三池支援方針を決定
- 2.18 向坂、「社会主義協会会員諸君に寄す」アピール
- 3.15 向坂、三池労組中央委員会（刷新同盟が退席 3.17分裂）終日傍聴
- 3.28 第2組合、強行就労開始
- 3.29 久保清刺殺
4. 6 中労委第2次藤林幹旋案提示 三池労組中央委員会、幹旋案拒否を決定
4. 8～17 （途中休会はさむ）炭労臨時大会（向坂傍聴し「もっとも暗い気持ちになったとき」）。幹旋案拒否を決定
- 4.13 社会主義協会「日刊社会主義」大牟田現地で刊行開始（～11.3 終刊200号）
- 6.19 新安保条約「自然成立」
- 6 『世界』に「三池のたたかいを見つめて」（大内兵衛・向坂逸郎対談）
- 7 『文藝春秋』に「わが生涯の闘争」
- 7.17 ホッパー前大集会 向坂あいさつ
- 7.19 炭労臨時大会（向坂傍聴）
池田内閣発足
- 7.28～8. 3 第1期ホッパー大学向坂、腹痛をおして参加
- 8.10 中労委第3次藤林・中山幹旋案提示 三池労組は拒否
- 8.18～9. 6 （途中休会）炭労臨時大会（向坂傍聴し「目を赤くする」）、幹旋案受諾決定
- 10.11～28 第2期ホッパー大学
11. 1 スト解除
- 12.18 三池労組闘争終結大会（向坂傍聴）
- 1961
- 初春から構造改革論争開始
- 8 三池労組過半数割れ
- 10 炭労、政策転換闘争開始
- 1962
- 4.29 三池労組中央委員会「長期抵抗・統一路線」を決定

5	向坂『マルクス伝』脱稿（「闘争は百万巻の書を読むよりも私にたくさんのことを教えてくれた」）
1963	
1.30～2. 3	炭労臨時大会、政策転換闘争の自己批判
7.10	三井第3次合理化に反対し、三池労組不調印闘争へ
8.23	三池労組指導部（宮川、久保田、灰原、塚元ら）、争議指導責任で解雇
11. 9	三川坑炭塵爆発 459人が殺され、CO中毒患者800人以上
11.16	向坂、災害現地訪れる
11.23	組合葬で向坂弔辞
1965	
9.30	灰原、炭労事務局長に
1967	
7.21	CO特別立法成立
1969	
2	向坂、国労『資本論』研究会開始
8	灰原、炭労事務局長退任（11月社会主義協会本部組織部長 塚元は全国オルグ）
1971	
3	国鉄反合理化研究会発足（向坂、当初は毎回参加）
8.24～28	国労函館大会、反マル生闘争方針確立
1972	
6	全通25回大会、「長期抵抗路線」
1979	
3.17	三池組合長・宮川睦男没 向坂弔辞
1985	
1.22	向坂逸郎没

まず向坂先生と三池の労働者のつきあいはたいへん古いわけです。敗戦後、直ちに始まりました。このときは実は先生は東京にいらっしゃいました。東京でやることはおそらく山ほどあったと思います。当時、ちょうどGHQが日本を解放して、当時のいわゆる労農派系の学者はいろいろな審議会の委員やGHQの専門部会などに引っ張りだこだった。もう一つは山川均さん、向坂先生のまた先生だと思うのですが、その方が民主人民連盟を提唱したり、あるいは歴史科学研究所という研究の集まりを持ったりした。これもおそらく山川さんにしてみれば、向坂先生が片腕のようにいてくれればいいなと思ったに違いないのです。

ところが向坂先生の本をいろいろ読んでみますと、自分は九州に行くと。「九大の昔の弟子たちから帰ってきてくださいと言われて、ほろりとした」からというような表現でだいたい書かれているのですが、どうもそれだけではないだろう。何か思い切って労働者の多いところに戻って、特に自分が生まれたところは三池、大牟田です、そういうところで自分が子供のころ机を並べて一緒に勉強した炭鉱労働者の子供たちと、ひとつ何かやってみようかという気持ちもずいぶんあったのではないかと思います。

山川均さんも実はそういうことを推奨したというのは、「関連抜き書き」（配付資料）に書かれています。「山川さんに、戦前であったか、労働者の都市大牟田について話したとき、そこにどっかりと座りこんで労働運動をやるといいですね、といわれたことがあった。戦後、九大に復職したとき、やはり、こんなことを言われた」（『わが生涯の闘い』『文藝春秋』1960. 7）と書かれています。

山川さんも手放すのは惜しかったと思うんです。こんな話をしていると時間がどんどんなくなってしまうのですが、実は山川さんも、若いころ九州あたりに住み込んで、一から労働者と一緒に何かやってみようかという試みをしたことがあるんです。これはうまくいかなかったのですが、何かそういう思いを向坂先生にも重ねて、こういう話をされたのかもしれない。

いずれにせよ、大牟田に戻って九州大学に復職しながら、三池の労働者との接触を求める。そのときに最初に親しくなったのが灰原茂雄さんです。灰原さんはそのときは三池炭鉱で設計関係の仕事をしていました。三池の地元で三池政治文化研究会という、地元のたとえば郵便局の局長さんなど、地方の文化人みたいな人たちや意識的な人たちを集めて、いろいろな啓蒙的な勉強会、講演会をやるといようなことを始めていた。

そのときに湯村武人さんという、当時、九州大学の助教授をされていたと思うのですが、この方が向坂先生と非常に親しかった。湯村さんが三池政治文化研究会のお世話をしていて、「向坂逸郎という先生がおるぞ。講演を頼んでみたらどうか」というので、三池政治文化研究会の講師に向坂先生を呼んで、それから親しくなり始めたということです。

先ほど平井先生がおっしゃっていましたが、三池労組は最初から立派な労働組合ではありませんでした。産業報国会が横滑りしたようなものであって、三池労組の結成大会は日の丸の旗を掲げてやったというようなところ。表現は悪いですが、本当に「眠れる豚」といわれたようなところでした。

しかし、そのなかに引き揚げてきた人たちや、戦後、食うに困って、どこか仕事がないかということで職を探していたインテリみたいな人たちなど、戦後の解放感の中で自分が何かできないかという思いの人たちが、炭鉱の中にはいっぱい集まってきた。そういう人たちがおのずから、いろいろな小さなグループなどをつくり始めました。本所支部、宮浦支部、三川支部、だいたいこの三つの大きな支部で有志がいろいろ集まって勉強会などを始めた。

そのときに灰原さんを中心に向坂先生を呼んで勉強会をやってみようということで、久保田さんというのは宮浦支部の中心メンバーで、後で組合長になる方です。この方や灰原さんなど何人かが向坂先生の下宿に集まって、10人とも20人ともいわれていますが、エンゲルスの『空想から科学へ』を使った勉強会を始める。

そこからだんだん枝分かれをしていって、三川支部、宮浦支部など、支部ごとの当時は同志会という名前だったらしいのですが、研究会が広がっていく。なかでも本所支部の研究会が、灰原さんがいた関係があるのですが、向坂先生と一番密接につながりを持った。

この本所支部にはもう一人、三池の現場の実力者といわれていた塚元敦義さんという方がいました。この方は戦闘機乗りだったそうです。特攻隊上がりですから、おそらく非常に頭が切れて判断力もある人物だった。私も晩年にはいろいろお話をさせていただいたのですが、灰原さんと塚元さんはこれまた名コンビでした。このお二人の持ち味で本所支部も生きてきたし、それから三池労組、あるいは三鉱連と三池労組、あるいは炭労全体と三池労組、こういう総合的な戦線の組み上げができていく。塚元さんはそのようなたいへんな重要な方です。この塚元さんという人もいて、人に恵まれたと言っていると思います。

実は向坂先生は三池労組だけに集中したわけではないのです。当時、八幡製鉄にも勉強会に行か

れたそうです。これは52～53年ぐらいまで続いたのではないかと思いますのですが、毎週1回ぐらいの頻度で多いときは行かれたそうです。ところが、これは残念ながら長続きしなかった。

もう一つ努力されたのは三池の職員組合です。先ほど平井先生が言われたように、三池は職員組合と炭鉱労働者の組合と全く別ですから、職員組合のほうがはるかに大卒のインテリが多いわけです。ここにも入り込んでいろいろな勉強会などをやろうとされた。この職員組合は、敗戦後の世の中が激動するような情勢のときには非常に戦闘的な労働組合だったそうです。

これも「関連抜き書き」をみていただきたいのですが、向坂先生は「興味あることは、敗戦後の大牟田でいちばん急進的な組合は、三池炭鉱の職員組合であったことである。私は、しばしば、この職員組合の会合に出席して話をさせられた。そしてその急進的な有り様に驚いた。……そのころ三池労組の方は、……炭鉱関係の組合では、最も弱い組合であった。しかし時とともに強くなっていた。他方職員組合は、戦後の資本主義が一応安定するとともに、おとなしくなっている」（『社会変革の条件と行為』『エコノミスト』61.5.16）という表現をされています。

こういう言い方は少し極端かもしれませんが、向坂先生はどちらかというとインテリには厳しいというか、現場労働者に本当に心を通わせながら、インテリ的な急進性についてはあまり信用しないというのがあったように思います。おそらくどういう労働者が本当に闘いの中の中心になって支えていくのかということが、ご自分の足を運んだ長い経験の中でだんだん、もともと急進主義に対してはあまり信用しなかった先生ですが、確証になっていったのかとも思います。

そういう経験を経ながら、結果的に八幡製鉄では、残念ながら人に恵まれなかったという表現をされていますが、一生付き合おうという人となかなか巡り合えなかった。しかし、三池では先ほど言ったような、信頼関係を持ってがんばり続けようという労働者と巡り合えたということで、結果的に三池の向坂教室になっていったとご理解いただければいいと思います。

さて、そういうなかでしだいに活動家層の人たちを、組合役員にまだそんなに進出はしていないのですが、一つの意識的な社会主義者のグループといいましょうか、そういうものにだんだんまとめていこうということで、当時、向坂、山川で『前進』という雑誌を出していました。この『前進』が灰原さんの話によれば、だいたい100部～130部、三池労組の活動家層に入っていたそうです。これを緩やかなネットワークにして、自然と何か固まりのようなものができたんだと思います。

これを会社側は非常に警戒した。会社側はこのグループを山川共産党と呼んだそうです。山川均の山川です。それでレッドパージがあったときに、実は灰原さん他何人か、いわゆる向坂教室のメンバーも本社のほうから指名されたそうです。これに対しては向坂、山川はじめ、これは断じて解雇させないというので、必要ならば、三井の本社に自分たちが直接乗り込んででもいいというような相談までされたそうです。そういうこともあったせいかもしれませんが、何とかレッドパージには灰原さんたちは引っかからなかった。

しかし、そういう労働者を萎縮させるような攻撃の中で、先ほど話をした本所支部が一番の拠点だった。本所支部の研究会はだいたい60人ぐらい参加していたが、レッドパージの後になるとわずか6人にまで減ってしまった。つまり、あんなところに近寄ると、いつ解雇されるかわからないということで、一時逃げてしまった。

そのように少人数で、それも向こうの攻撃が強くなると萎縮させられて、なかなかうまくいかな

いというなかでもしだいに運動が前進していった。特に社会党が分裂して左派社会党ができる。この左派社会党ができる前後から、三池の意識的な活動家層が社会党づくりというものを始めるわけです。

これも灰原さんあたりが一番中心だったと思うんです。ただ、灰原さんたちだけでなく、阿具根登さんという、これも組合長をしていて社会党の参議院議員になった方ですが、たたき上げの三池労組の大ボスというか、実力者だと思います。そういう方や久保田さんとか、必ずしもいわゆる向坂教室にずっと出ている人ではないような人たちも含めて、ふんわりとしてでしょうけれども、社会党というものをつくる。そこにしだいに灰原さんやいろいろな人たちが加わって行って、そこにも向坂先生が相当熱心にいろいろな協力をされた。

企業別労働組合ですから、そのなかで労働者の政党というものがきちんと存在して、両方がかみ合わなければ、それは必ず後退させられるか、あるいは分裂させられるかということになるわけです。労働組合だけいくら強くしようとしても、それはうまくいかない。やはりそのなかに一定の長期的な展望や社会主義思想を持った集団というものがあって、その両者が有機的な関係を持たなければだめだという。これはおそらく向坂先生たちも当初から意識的に考えられていたのではないかと思います。

よく灰原さんが言われていましたが、三池ではXYZ論がある。X層というのは非常に組合意識の高い層だ。Y層は会社派というか、企業別組合ですから、どうしても会社に直結するような層がいます。Z層はどちらでもないいわゆる無関心層だ。労働組合を強くするにはX層をどれだけ固めてだんだん強くしていくか。それがZ層にどれだけ信頼関係を持てるかにかかるといえることを言われていました。おそらくその背景には当時でいえば社会党、特に左派社会党ですが、そういう存在が非常に大事だというものがあったのではないかと思います。

そのようにして左派社会党づくりを始めながら、だんだん労働組合全体として前向きになっていく。先ほど平井先生がお話されましたので、ここは省きたいと思います。63日間闘争という大きな闘いがあった。ここで幹部闘争ではだめで、やはり大衆闘争にしていこうという自己批判をする。

なお、炭労大会で63日間闘争の自己批判の提案をしたのは灰原茂雄さんです。当時、労働組合が、特に炭労で長々と総括をするなどというのはどうも前例がなかったようです。集まって適当に議論して、執行部はいいか悪いかの決着をつけたら、あとは夜一杯やるかと、まだそんな感じのレベルだったようなんです。

灰原さんは63日間闘争の自己批判を延々1時間とか2時間提案したそうです。そうしたら、会場から、「いい加減にやめろ」と言って、なかにはドスをちらつかせて、「おまえはもう、そんな長い説教はやめろ」と脅かされたこともあるという話を灰原さんから伺いました（笑）。それぐらい、まず一つの闘いを総括して積み上げて、次、何をやるかという訓練自体がなかなか当時としてはできていたわけではない。そういうことを思い切ってやっていかないと労働組合は強くないというのは、やはり向坂教室の薫陶を受けた灰原さんやそういう人たちの意識性の表現です。

それから、先ほど言われた「英雄なき113日闘争」、これでもたいへん大きな前進を遂げました。そして、ここで組合員の自信というか、どのようにして労働者が成長するかということを、向坂先

生はずいぶん学ばれたのではないかと思います。そのことについて、1955年7月の『思想』の論文の「抜書き」をみてください。ある組合（三池労組）に「社会主義政党员が少しずつでき、彼等は次第に、日常の活動といく回かの大きな闘いを通じて、組合の主導的人物に成長していった」そして113日闘争に「勝って、首切りを撤回させ、会社側に大きな精神的打撃をも与えた。組合員の間には、労働組合の力の自信を与えた。ことに、首切り人員の中に、社会主義政党的な主要な人々が……巧みに配列されてあった。そしてこの闘いは、これを完全に撤回させることに成功した。この闘いのあとで、この組合における社会主義政党员は、急激に増加した。組合の真面目な成員に力の自信を与えたのである。力の自信は、組合員として『踏み切る』ことを可能にし、飛躍の力となる」（『労働組合と社会主義政党』『思想』55.7月号）。ここでおそらく先生自身も自信をつけてもらった。もちろんマルクス主義に対する自信はもともとあるのでしょうけれども、実際運動の中でどういうことが労働者を鍛えるかということについての確信のようなものを、だんだん持たれ始めたのではないかと思います。

このように自信をつけ始めた組合員の中で始められたのが『資本論』の勉強会ということになります。その前にも少しやられていたようですが、本所支部としてきちんと勉強会をやったのは「英雄なき113日闘争」の後からということになります。その『資本論』の勉強会をずっと続けるなかで、教育者が教育されるというわけで、向坂先生自身も変わっていかれる。それをよく示しているのが次の「抜書き」です。「私は、若い時のような不遜な考えはなくなって、自分の学問や思想をできるだけ広い範囲の働く階級の人々に分ってもらうことが、義務であり、またやりがいのある仕事であると思うようになった。私は、本来私のやっている研究自身が内的要求として含んでいたものすら、やっとこの頃になって言葉としてでなく、分かってきたらしい。この位のことを分かるにも、私のような男には、四十年近い年月がかかっている」（『『やさしい』ということについて』『政治公論』55.4）。

つまり、自分がマルクス主義を究める、『資本論』を本当に究めるというのは、いったい何のためにやっているのかという、ある意味では当たり前のことかもしれませんが、そういう学問が持っている内的要求。虚心坦懐にそれに臨めば、自分もこの世の中をよくするために何か力を割こうと思うのは、人間として自然ではないだろうか。

そして、それを推進するのは労働者一人ひとりですから、そういう人たちとわかってもらうように話し合う。あるいは労働者がどういうことを疑問に思っているのか。どこで行き詰まっているのかというのを本当に自分が勉強する。こういう相互関係を生かしていくのが自分の学問なんだということ、非常にわかりやすく書かれています。

全部言っていると時間がありません。少し飛ばさせていただきますが、そのようにして先ほど平井先生が言われたように、三池の労働運動が一味違う労働運動として、総評労働運動全体にも大きな影響を及ぼしていきます。その一味違う中身というのは、先ほど言われた職場闘争、大衆闘争です。それから平井先生は触れられていませんでしたが、長期計画協定というものを三池、三鉱連が結ぶわけです。113日闘争の後です。これはどういうものかという、経営の第一義的な任務は完全雇用である。つまり、勝手に首切りをさせない。それを労使の協議で協議決定をするんだということまで押し込むような労働協約です。これを三鉱連と三井鉱山の間で結ぶ。もう一つは安全第一。

経営の基本はやはり安全が第一でなくてはならないということを結ぶ。

当時の日本の労働組合のなかで、一番進んだ協定、協約を結ぶわけですが。しかも三池の労働組合の偉いところというのでしょうか、ここが一味違うのですが、普通そういう協定を結ぶと大きい労働組合は安心してしまって、どうしても幹部闘争になりがちです。協定を生かして何とか話し合いで経営者を説得して、あるいは譲るところは多少譲っても何とかしようとなりがちです。しかし、三池の場合はここが違って、徹底的な大衆闘争でもって相手を押し返さない限り、協定など、いつ紙くずになるかわからない。そういう構えで先ほど平井先生が言われた職場闘争、到達闘争を全面的に展開していく。これが三鉱連の他の山と三池の差にだんだんなってくるのです。

それから、そういう三池労働運動の質というものが、総評労働運動全体に広がり始める。これが組織綱領草案です。これは後でお蔵入りにになってしまうのですが、そのなかで主に清水慎三さんが書かれたのでしょうけれども、三池の職場闘争はどういうものかということを総評を通じて、他の労働組合にも広げていく役割も果たすようになる。

こうなってくると、まず炭鉱資本全体にとってみれば、三井鉱山の経営者はクソの役にも立たない弱腰だと。労働組合にどんどん押されて、とんでもない協定まで結んで、こんなものが炭鉱全体に広がったり、あるいは日本の全産業に広がったりしたら、とてもではないけれども、利潤追求の妨げになる。そういうことで三池に対して集中攻撃の準備をすることになっていきます。

それが「総資本のまきかえし」ということで、これも先ほど平井先生が言われた43日闘争とロックアウトです。三権移譲、職場闘争、到達闘争、そういう闘いに対してロックアウトまで仕掛けてつぶそうとするという攻撃となって表れてくる。実は60年の三池闘争はここから始まっていると言っていいと思います。単なる指名解雇だけが焦点ではなくて、三池労働運動の持っている質に対して総資本がたいへんな警戒心を持った。

これをつぶさない限り、当時、いわゆるエネルギー転換などいろいろな言いながら、炭鉱産業全体をスクラップ化していこうという意図を総資本は持っていましたから、炭鉱労働者の11万人首切りもなかなかうまくいかない。いわんや、他の産業の首切りも最強の労働組合である炭労をつぶさない限りはうまくいかない。そのためには三池を何としてもたたきつぶさなければいけないという決意を向こうなりにすることになります。

こういう階級全体の力関係というのでしょうか、大きな政治的な動きというものを向坂先生は極めて的確に見通していました。1958年に灰原さんに宛てて向坂先生が出した手紙で次のように言っています。「力の過信は今最大の危険です。三池労組がどんなに強くとも、いま資本家階級全体の力に孤立して闘う力はありません。ことに近く迫る闘いは、困難をきわめるだろうと思います。それだけに職組に対する無用の挑発は絶対に避くべきものと存じます。……昨年秋から、職組にも入り込んで味方をつくりたいと多少の努力をいたしました、まだ実をむすびません」(58.10月 灰原宛向坂書簡)。

つまり60年闘争になるかどうかは別にして、ここ数年内に総資本が三池労組に襲いかかるだろう。そのためには姿勢をうんと低くして、敵をできるだけつくらないようにして、態勢を準備しなさいよということを指示、というとおかしいですね。アドバイスされています。これは先ほど平井先生が少しおっしゃった、実は三川支部の職場闘争に対して、「ちょっとこれは気をつけたほうが

いいぞ」ということなんです。

その後に太田薫さんが面白い回想をされています。少し話が錯綜しますが、太田さんがこれを書かれたのは1985年です。このとき太田さんはもう向坂先生とたもとを分かっています。協会が二つに分かれてしまって、太田さんは向坂先生を批判する立場で、そういう立場でも、ここまで書いたというのか、客観的なものと言っていいと思います。太田さんはこのように言っています。向坂先生は「行き過ぎを気にされて、宮浦支部では支部に連絡をして全体の意思を高めてから行動するようになった。しかし、生産性の高い三川坑ではいきすぎがあって、向坂さんは心配されて灰原さんを書記長にしておさえようとされた。……職場闘争の性格を見抜かず美化したのは向坂さんではなくて、清水慎三さんや藤田若雄さんだった」（太田薫 太田協会『社会主義』85.5）。

太田さんは言葉づかいが荒っぽいから、これは少し極端に言い過ぎているきらいはもちろんあります。別に向坂先生が灰原さんを書記長にしたわけでも何でもありません。それから、藤田若雄さんや清水慎三さんがそんなに三池の職場闘争を美化したわけではないと思います。ただ、太田さんがここに言われるような面がなかったとは言えないかもしれません。

それで向坂先生は大きな階級と階級の、総資本と総労働の闘いという局面だから、本当に油断をするなよと。内部の亀裂はできるだけ少なくしろよという姿勢で臨んだことは間違いのないのです。

実はこれは60年闘争の敵の攻撃の一番のかなめである生産阻害者論などに、どういうスタンスで対処していくかという、重大な問題を含んだアドバイスではあります。とりあえずそういうことになります。

ですから、先生は別に三池の戦術委員会に「ああしろこうしろ」と言ったわけではないのだけれども、三池を孤立させないようにどうしたらいいか自分でできることはずいぶん具体的にやられたようです。

その例が、1959年7月9日に灰原さんが向坂先生に出した手紙が抜書きにあります。「三池は独走を決意しておりますが、これは『三鉱連』を割ってでもやる」、これは先ほど平井先生が言われた三鉱連御岳大会のことを指しています。御岳大会の直前の手紙ですが、そこでは三鉱連がどうであろうが、三池はこの首切りを許さずに独走いたしますという決意を固めていたということです。

問題はそれを炭労はどう把握するか。つまり、三池は独走するけれども、炭労、総評の統一闘争にどう発展させていくかということを考えていきます。それにあたって、灰原さんは先生にいろいろお願いをしています。

「第一に、河野氏に至急会って（なるべく外で）実情を彼の口から聞いていただきたい。元気つけてやってください」。河野さんというのは三池出身で、このときは三鉱連の事務局長をされていた方です。向坂先生がずかずかと三鉱連の部屋に入って行って、河野さんと話をしたら、それだけで「あれはいったい何だ？」になりますから、灰原さんも気をつかって、（なるべく外で）と手紙に書かれています。

「第二に党の立場で、三池の敗北の意味をよくわかってくれる人に話をしていただき、活動に入って貰いたいのです」。つまり社会党を何とか動かせられないかということです。

「第三に党か上野オルグ」、上野オルグというのはきょうお見えになっていますが、上野建一さんが当時、協会の『社会主義』の編集部にいました。「党か上野オルグでも結構ですが、北海道三山

の組合員」，三山というのは三鉱連の他の北海道の三つの山です。ここの実情が本当はどうか。これは組合ルートではもうわからなくなっているんです。三池を徹底的に孤立させて，三鉱連の他単組は幹部が全部抑え込んでしまって，現場交流などがほとんどできない状態ですから，党あるいはいろいろなグループを使って，本当に現場の組合員の気持ちはどうかをきちんとつかまないとできないということです。

「第四に太田，岩井両氏にあっていただきたい」，つまり太田さんは総評の議長でした。岩井さんは事務局長で，この2人が何といても当時の勘所ですから，会っていろいろ意見交換を是非してほしい。

「第五に先生でない人に，炭労の原委員長か古賀事務局長にあって動向を探っていただきたい」。こういうことを灰原さんは頼んでいるわけです。

おそらく向坂先生はこれに対して誠実に精一杯いろいろなことをされたのだろうと思います。組合に口を出すとか，そういうことではなくて，支援体制をどうやって自分ならつくれるか。そのためには自分に何ができるかを，いろいろ汗をかかれたのではないかと思います。それで灰原さんに次のような返事を出しています。

「太田，岩井両氏に大兄の出される報告の手紙は，大変いい成果をもたらしています。……しかし，あなたも忙しいでせうから，肝要な所だけでいいと思います。私にくださるはがきお手紙も，忙しい中から書かれると思うと大変ありがたうらしく，且つ安心いたします。しかし，長期戦ですから，御自分のからだを大事にして，暇をつくっては寝ることにしてください。食事を規則的に，なるべくのんびりという気持ちでやってください。いま大兄に病気をされると大変です。塚元君にもそういつてからだを大事にするように言ってください」（59.9.10 灰原宛向坂書簡）。なお塚元君とは，塚元敦義さんのことです。

やはり向坂先生が灰原さんにアドバイスをするんです。三池労組としてこういう方針をとれなどというアドバイスではないですよ。太田さんや岩井さんという勘所の人たちにできるだけ細かくこまめに手紙を書いて，闘争の現状を報告しなさいというアドバイスです。これを灰原さんがどうも忠実に守ったらしいです。

灰原さんは，ここにご存じの方がいるでしょうけれども，手紙魔なのです（笑）。1回手紙を書き出すと灰原さんから，毎週のように手紙がくるから，返事を書くのがたいへんだという感じの，本当に手紙を大事にされる方です。ですから，おそらく太田さん，岩井さんに連日のように「いま現場はこうだ。組合員はこういうことを考えている」という手紙を出されたのではないかと思います。

それが太田さんと岩井さんと先生が会って話をしてみると，非常にいい効果を上げているよと。ただ，手紙ばかり書いていたら夜寝る時間もなくなるだろうから，ほどほどにして，よく寝なさいというわけです。

このように大闘争になるぞということで腹構えを決めて，いったいどうしたらいいかということを実体的にご自問されながら，灰原さんにもアドバイスをされるという関係のなかで，いよいよ三池闘争，60年闘争に突入していきます。

先生は常に現場にしようとされました。これは「日刊社会主義」という，三池闘争の最中という

か、4月以降ですが、向坂先生が指導されていた協会の九州支局の人たちが『社会主義』という雑誌の代わりに、裏表1枚の「日刊社会主義」というのを毎日出すんです。確か展示にもあったと思いますが、この「日刊社会主義」の第1号に次のように書かれました。「私はせっせと三池に足を運ぶ。何んの足しにもならない老いたる者。ピケをいっしょに張る体力もない者、そんな男が、三池に来て何になるのか、としばしば自問する。別に何ということはない。三池に行きたくなるから行くのである。ただ、かいがいしく活動している人々の中にいるのがたのしいのである。少し疲れたから明日はやめようと思って寝る。翌日の朝刊を見ていると、また行きたくなる。まるで恋人の所にでも行くようだとは人は笑う」（「日刊社会主義」第1号 60.4.17）。要するに、自分が行って何かできるわけではないのだけれども、せっせせっせと毎日のように足を運んだということです。

ただ、このようにあっさりと書かれているのですが、向坂先生や灰原さんから聞きたいいろいろなエピソードがあるんです。この「日刊社会主義」は九州大学の助手や研究生などを中心にガリ版で切って印刷をした。夏の暑い、だんだんホッパー前決戦のようになっていきますから、労働者が皆ヘルメットをかぶって汗をだらだら流して座り込みをしているところに配って歩いた。

そうしたらある大学院か何かの人が、「いや、先生、ここは暑い」、「福岡の九州大学かどこかの研究室で印刷製本だけやって、大牟田へ持ってきて配ったらいいんじゃないか」とぼろっと言っただけらしいんです。そうしたら、ものすごい勢いで雷が落ちたという話です。「ここでやるから意味があるんだ」と怒られた。

それから、これはご本人の名誉のために名は伏せますが九州大学の助教授か何かをされていた方が「私の専門は学問です」と。つまり研究が本来だから、三池に行くのは自分は遠慮させてほしいと。黙ってさばればいいのに、わざわざ理屈を考えて向坂先生のところに行って、いろいろしゃべったらしいんです。これはカンカンになって怒られたという有名な話です（笑）。

こんなエピソードがいっぱいあります。ですから本当に体を張って、お腹を壊して薬を飲みながら、ホッパー前をずっと回って歩いた。そして、衛生状態をすごく気にされた。トイレだとか、そういうものだと思います。ハエが発生して、もし伝染病が出たら、ホッパー前のピケも何も壊滅するということで、鳥取大学の医学部の加茂先生と連絡を取って医者を派遣させるとか、側面から気がついたことをやられたようです。

それから、向坂先生が闘争中、最も暗い気持ちになったという述懐をされているのが、以下の抜書きです。60年4月の炭労臨時大会についてです。先ほど平井先生がおっしゃった第2次幹旋案です。これは全く屈辱そのものの幹旋案です。これをのむかどうかということで、炭労大会が激論を交わしていたときに実は一番憂うつな気持ちになったという述懐をされています。

「私の憂うつさは、おしかくすことにつとめはしたものの、何とも名状できない気持ちであった。第2組合ができたときよりも、この時のほうが、今考えてみると、私の気持ちを暗くした。……藤林幹旋案を呑んだ後、第1組合がどうなるかについては、まことに深刻な事態が想定された」。世間はあの日本一の三池労組に第二組合ができてしまったから、もうだめじゃないかというような、そっちのほうがショックだったんです。総評もそうだったようです。ところが向坂先生は第二組合ができたぐらいでは別にどうってということはない。そうではなくて、もし炭労が藤林幹旋案をのんでしまったら、どうなるだろうか。「第一組合は少数を残して崩壊し、三池労組が出発点に帰るこ

とすら考えないわけにはいかなかった。そして、私は、ごく少数の三池労組員と、どんな困難な道でも共に学びながら歩こう、不屈という言葉はこんな時のためにあると自分にいいかせた」と述懐をされている(60.4.9～17 炭労臨時大会傍聴 「三池の労働者と共に」)。

つまり、闘って妥協するということは、当然のことなのです。しかし、闘わずに屈辱的な妥協をされるというのは労働運動にとっていったい何を意味するかということを非常によくわかっていました。並の学者ではこんな理解はできないと思います。ここでやめたら、おそらく組合不信から、組合内部混乱から、たいへんなことになるだろうという判断をされて、このときだけはさすがに名状しがたい気分だったと述懐されています。

もう一つ妥結のときはどうしたかということですが、これは朝日新聞の記事です。「三池の主婦たちはほとんどが涙をにじませ、あるいはハンカチで顔をおおっている。……あとで廊下に出て抱き合って泣く主婦もあった。『泣きなさんな、泣くときではない』。傍聴にきていた向坂逸郎氏が、自分も目を赤くしてこう言った。すると主婦たちはボロボロ涙をこぼした」(「朝日」60.9.7)。炭労大会で最後の斡旋案をやむを得ず受諾しようというときに、三池の主婦たちは泣いたと。そのとき「泣きなさんな、泣くときではない」と向坂逸郎が言ったら、実は向坂逸郎の目も真っ赤だったという新聞記事です。

これは先生も何か他のところで書かれています。このときは「泣きなさんな、これから闘うんです」と言ったと、たしか先生の文章にはなっています。よく自分であのときにああいうことが言えたものだというようなことも、その文章の中では言っていますが、本当に一緒になって喜怒哀楽をしたということだと思います。

それから、收拾の明快な判断。大きな闘いですから、どこかで引かないと徹底的に攻撃をされて、戦線が壊滅させられる。ですから、どこかで妥協をしなければいけないという判断も必要となる。先生も内々していたというのはいろいろな述懐の中にいっぱい出てきます。特に岩井さんとは大牟田のそば屋の2階でそうめんをすすりながら、「そろそろ潮時かな」という話をしたとか、太田薫さんとは西鉄の電車の中で、同様な話をしたというようなことはちょこちょこ出てきます。

ちょうどこのとき安保闘争が収束に向かっていました。それで池田内閣が成立して、いわゆる政治から経済へということで、全体的に大きな変動が起こりつつあった。そういうなかで三池労組だけが突出して、いったいどこまで戦線が持つかという大局的な判断もあったと思います。そういうことはきちんと見定めながら、では、戦線收拾した後、いったいどうしたらいいだろうかということをつくり考えていたのだらうと思います。

時間もほとんどきてしまったので、触りのところを少しだけ言います。職場闘争というものが一番の焦点だったという話をしましたが、これがいわゆる物とりの職場闘争とは質がだいぶ違う。質が違うというのは、必ずしも生産管理や何か職場の労働者権力だとか、そんな大げさなものではないのです。つまり労働者というものがこの社会を支えているんだ。そういう支えている労働者が当たり前安全に働き続けられるということは、社会全体にとってもなくてはならないことではないか。

それを常にそうさせないのは何かというと、資本側の利潤衝動ではないか。安全は常に無視する。労働者の中でも本当に仕事を真面目にやる労働者より、会社にゴマをする人間のほうを必ず優遇す

る。これは今でも全く同じですよ。国労つぶしはこうしてやられた。そして労働者の中に差別を持ち込んで、お互いに競争させる。人間として墮落させる。

そして、闘いの火種をつくるのは相手がやることだ。我々は社会の主人公なのだから、この社会を建設的に前向きにつくっていくために抵抗するのだと。雑誌の『世界』か何かで「三池の闘いを見つめて」という大内兵衛さんとの対談があるのですが、このなかにそういうことをわかりやすく書いています。

そこで向坂先生は、なまけ者は社会主義者になれないと言い切っています。あるいはなまけ者はいい社会をつくれな。つまり、自分だけいい目を見よう、自分だけ助かろうということの職場闘争ではだめだというわけです。

先ほど平井先生が少し言った「隠し田」というものがありますよね。ある職場でたまたま労使の力関係で労働者が非常に有利だということで、たまたま物が取れる。そうすると当局は何を言うかという、必ず「これは内緒だぞ。おまえらだけ労働慣行として、こういうことを認めてやるけど、ピラにしたり、組合大会なんかで絶対報告するなよ」と言う。これも今も全く同じだと思うのですが、これではだめだ。それは自分たちの職場だけが一時的にいいかもしれないけれども、必ず後で相手に足元を見すかされてやられるぞと三池労組は考えた。

そういうのではなくて、本当に働く者、皆が幸せになるような職場闘争。自分の職場だけ、いわんや、自分だけがいいというような、ただただ自分の権利だけを主張するような職場闘争というものを克服する努力。やはり『資本論』を勉強したり、マルクスの古典をずっと勉強したりして、社会の仕組み全体から大きな力をつくって変えないと、労働者の本当の意味での幸せはないという。そういう筋というのでしょうか、向坂先生は職場闘争に筋がなければいけないということをよく言われていたのですが、貫く筋が長年の学習運動の中で労働者一人ひとりの身についていったんだと思います。

ですから、これはいろいろな格差はもちろんです、この三池闘争の強靱さというもの、おれたちは決してサボでも何でもないんだ、人間として当たり前のことを要求しているんだという信念のようなものが、機動隊とホッパー前で対峙する。家を出るときには明日の命はないかもしれないと杯を交わして、武器の代わりにホッパーパイプを腰に差して、防毒マスクを付けてヘルメットをかぶって、ピケに出る。その誇りというのでしょうか、その根拠はそういう思想にあったと思うのです。

そういう思想に貫かれた職場闘争であった、権利闘争であったということは、三池が他の労働組合と一味違う強靱さを持った根拠ではないか。それは向坂先生をはじめとする人たちが懸命になって、三池の労働者たちと一緒に信頼関係を本当につくって、こつこつと勉強を積み重ねていった成果ではないかと思います。

以上、ほかにまだ言いたいことはいっぱいあるのですが、時間になりますので、とりあえずこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

（いしこ・やすくに 『労農派マルクス主義』 著者）